

赤子から森羅万象に聖なるものを見出す人

徳沢愛子第十詩集『加賀友禪流』に寄せて

1

一人の赤子は、何かを試されるために、この世に奇跡のように立ち現われて、父母たちに固有な名を名付けられる。その偶然とも必然とも知れない混沌とした運命的な瞬間に、宇宙の不可思議な生命の力によって、一人一人がこの世に誕生してくる。徳沢愛子さんの第五詩集ではあるが初めての方言詩集『ほんならおゆるっしゅ』のあとがきには、徳沢さんの誕生時の秘話が書き記されている。徳沢さんの母親が身ごもった時に、上の子を産んで間もなく、経済的にも大変だったので、墮胎するために病院に向かった。すると途中で近所のおばさんに呼び止められて、どこへ行くのかと尋ねられて正直に話してしまった。そのおばさんは「あーらーあ ほんなかわいそげなことせんもんや ばちゃあたりみつそお 天からの授かりもんやがいね あんたさん 産まにやどーするいね おめでたいこっちやがいね」と母を説得したという。母はその言葉に従って徳沢さんを出産し、皆から愛されるように愛子と名付けたという。このお節介なおばさんと母とがその時にめぐり合わなければ、愛子という存在はなかった。徳沢

さんは結婚し五人の男子に恵まれ、現在は子供たちが全て独立して、きつと多くのお孫さんもいることだろう。徳沢さんは歓迎されざる存在であった自分が、この世に「愛」という言葉を背負って出現したことにきつと複雑な思いを抱いたはずだ。だがそのことが逆に「愛すること」やこの世にあることに感謝することを人生の重要なテーマとして考えられ実践されてきたように思われる。徳沢さんの詩には、無償の父母の愛とお節介なおばさんの愛が重ねられ、それらが無尽蔵に溢れ出てくるのだろう。

徳沢さんは現在まで九冊の詩集と二冊のエッセイ集を出している。第一詩集『なりふりかまわぬ詩』（三十六篇、私家版）は三十五歳の一九七四年に刊行された。金沢大学教育学部（一部乙類）を卒業し二十二歳で結婚し、すでに男子五人の母親で、その育児の最中にこの詩集は誕生した。詩篇の多くは新しい命が成長していく時の驚きであり、生命の讃歌である。ただその生命の讃歌は手放しの単純なものではない。母と高校一年だった徳沢さんたち家族は、週末だったために医者に診せる判断が遅れて妹を亡くしてしまった。その小学校一年の妹の存在が徳沢さんの心に深く刻まれている。どこかで妹の哀悼の思いを込めて我が子を慈しみ育てていることのように感じられる。今生きていることが妹への感謝につながり、妹の命を引き継いだ子供たちと共に生きていこうとする「なりふりかまわぬ」決意が、第一詩集の中に底に流れるテーマである

と伝わってきた。その詩篇の中に「原爆の日」という詩もある。

原爆の日

古タイヤをころがして

幼な子が追っていく

真白のスカートがひるがえる八月の朝

鮮光の朝をイカリの筆で

再びよみがえらせ

問うてみるたたいてみる押してみる

子育てに追われながらも、原爆で亡くなった多くの民衆の悲劇とその無差別大量虐殺への怒りを短い詩に記している。徳沢さんは、原爆や空襲で子供など非戦闘員が一瞬のうちには惨劇の場に立たされることを、日常的な場において想像力で甦らせようとしていた。徳沢さんは一九三九年生まれで、幼いながらも戦争時代を知っており、疎開した富山で街の大半を焼き尽くした富山空襲も経験している。子育てを通しながらも歴史を担う根拠を胸に秘め少ない時間を大切に使いながら詩人としての出発を始めたのだ。

一九八〇年に刊行された第二詩集『空に知ろし召す』（三十五篇、北国出版社）に「赤子」という詩がある。この世

に誕生した子と母との赤裸々な原点が書き記されている。

赤子よ

吸い出せ 吸い出せ

小さな乳房

へその緒も乾かぬ者が

舌丸め

地球をも引きづる力で

乳吸い出す

塩鱈かみ

麦茶すすり

腰ひもしつかと結び固め

さあ 用意は整った

あとは 任すぞ

吸い出せ 吸い出せ

小さな乳房

乳は塩っぱいか

水っぱいか

何にも言わず

吸い出せ 吸い出せ

この目をにらんで力を出して

塩鱈 麦茶に腰ひもの

この白い乳を吸いとって

力を貯え

今はただ

この目から目を離さず

吸い出せ 吸い出せ

遅しく吸いつくせ

この詩は産まれたばかりの赤子の生命の原初的な力が乗り移っている。徳沢さんは我が子を見ているはずなのに、実は人間を超えた生命誕生の神秘を自分の乳房を吸いとうとする赤子の存在から感じている。誰から教わったわけでもなく、乳を吸いとうとする赤子の無意識な行動に徳沢さんは、「地球を引きづる力」さえ実感して、赤子を讃えている。けれども乳は甘い乳ではなく、塩鱈と麦茶から補給されたもので、しょっぱく苦いものでもあることを告げていて、赤子が母乳以外の他の食物を取ることを暗示させている。徳沢さんのこの赤子の詩には、母を通じた人間の原点を記録し、その自立を促す生命の讃歌を読み取ることが出来るだろう。この詩行のリズムを読んでいると、読むものが赤子時代を想起して、赤子に戻ったようになって母親の乳房のありがたさに感謝の念をきつと抱かせるだろう。徳沢さんは赤子の中に命を産み出した神のような聖なるものの存在を感じていたのだら

うと思われる。そのことを記した詩がこの「赤子」だったのだ。また第二詩集には、「K君」という詩がある。わが子ではない障害を持った子供に注がれる徳沢さんの視線にも私は引き込まれた。

K 君

細長い顔がゆがんでいる
赤い舌がゆがんでいる
首にしみつけゆがんでいる
腕から指がゆがんでいる
モンペの中がゆがんでいる
話すと言葉がゆがんでいる
車椅子の上でゆがんでいる
ゆがんで ねじれて もつれた中から
真直ぐ私を見る
光りをとまらせ私を見る
31才の幼な子で私を見る
先生と呼んで私を見る
地球は本当に青いのか
ぼくの住んでる町は美しいのか
人の心は何色にやさしいのか

私は目をしばつかせ座り直す
私は組んでいた足をほどいて
律義者のようにひざ小僧を揃える

久方ぶりの眩しい雪の晴れ間

徳沢さんは、ゆがみをともなった身体を生まれながらに持った三十一歳の青年が、真直ぐな心を持って自分を見詰めていることにたじろいでいる。このように存在することへの驚きの問いを発する真に純粋な存在の前で、徳沢さんは襟を正そうとする。そして障害を抱えた若者から大切なものを学ぼうとする生徒のように振舞っている。身体のゆがみの苦悩を背負っている存在者から、「地球は本当に青いのか／ぼくの住んでる町は美しいのか／人の心は何色にやさしいのか」と問われた徳沢さんは、その青年の心に詩的な精神を見ていたのだろう。徳沢さんは障害者の生きる姿に健常者には想像もできない、生きることの真実を見出していたのだとこの詩から感じられる。徳沢さんは五人の男子を産み育てながら、ボランティアで障害者たちに週一回の国語教室の講師をしていたという。十名近い生徒たちと深い交流を实践したことがエッセイ集でも紹介されている。障害者が自らの言葉を獲得していく喜びを我がことのように思い、生徒たちの真剣さや複

雑な障害者の心理などを徳沢さんが逆に学んでいく姿勢には、障害者の社会参加を実践する純粋さと遅しさを感ずる。そのように徳沢さんは多忙な日常の中でも社会的なボランティア活動をし続け、さらに個人詩誌「日々草」で溢れるように詩やエッセイを書き続けてきた詩人なのだ。

2

第三詩集『子宝』（六十五篇、北国出版社）にも我が子の詩もあるが、障害者の子供たちを書き記した詩篇も数多く入っている。その中に「哀しみの歌」という詩があるので引用する。

哀しみの歌

哀しみは
こわれた頭のめしいたをさな子
明るい光に手を打って
キャラキャラ笑う声のあたり
哀しみは
12歳の重心*の娘
か細い白い股より流れたる
赤き血潮のそのあたり

哀しみは

20歳の筋ジスの青年

健やかなる

男の黒々としたそのあたり

哀しみは

植物人間の我が子に

赤い風船つけて

運動会を走る母

抱いて汗して笑って光った金歯のあたり

哀しみは

30歳の重心の息子に

お粥を食べさせる白髪の父

寥寥と風鳴るうなじあたり

ああ 哀しみは

いつも普段着のまま

何気ない素振りです

不意にあの角を曲って現われる

*重心⇨重症心身障害児

この詩を読むと、徳沢さんが障害児を守り育てている家族

の大変な現場に寄り添っていて、その視線で詩作しているこ

とが分かる。障害児も発育段階によって心身とも大人の身体

になっていく。けれども様々な条件があり結婚し家庭を持つ

こともままならないのが現状なのだろう。また親御さんの人

並みのことをしてあげたいが、それがままならないという切

ない思いが「哀しみ」となってこの詩が生まれたのだ。障害

者の親御さんの心に迫っていった徳沢さんの視線は、いつも

は気丈に生きているが「不意にあの角を曲って」哀しみが押

し寄せてくる人間の存在を「普段着のまま」に物語っている。

そこには何も虚飾がなく、ありのままを写し取ろうとし真実

を語ろうとする、観察者でありながら同伴者でもあるとうす

る高感度な詩的精神がある。

一九八三年に刊行した第四詩集『徳沢愛子詩集』（三十四篇、

芸風書院）は第一詩集から第三詩集からの詩選集でもあるが、

新しい詩篇も収録されている。その中に「白い糸」という神

に触れた詩が一篇だけあった。

白い糸

キリスト様

あなたは白い糸です

30番の素直なもめん糸です

銀色に光る一本の針に

朝も夕べもとりますがつて

一生懸命ついていくのです

ね

勇ましい針が破れたひざごぞうを

ぐるぐるまわる

あなたは疲れてすりへって穴のあいた布地に

新しい力に満ちた端布をめあわせ

ひとすじについていくのです

ね

白い細やかな足跡を残して

円周から中心に向かって

ちっともそれについていくのです

ね

なぜ行かねばならぬのです

ね

何も聞かず

ただ丸くついていこうとなさるのです

ね

丸く丈夫に甦った

ひざごぞうのてっぺんで喜ぶのです

ね

裸の幼な子のように喜ぶのです

ね

白い糸だったことを

銀色の針についた白い糸だったことを

さびしいひざごぞうのために

の試みであったと思われる。

3

徳沢さんには金沢弁の方言詩集が三冊ある。これらの詩群の試みは評価をされて金沢の教科書の副読本でも紹介されている。徳沢さんのいたずらっ子の側面が全開でのびのびと筆が走り回っているように思われる。

たんちにおっぱい

あげまいか

あげまいか

あげると うるしい
なんでか うるしい

おなかへつても あげまいか

泣きとうても あげまいか

大風吹くとも あげまいか

父ちゃんに ごたむかれても

あげまいか

ほなけな

張つても こん

満ちても こん

溢れ出ても こん

あげまいか

あげまいか

こっぽつと

ぬくとい おっぱい

たんと

たんと あげまいか

このいちゃけな 宝もんに

わても おんぼらあつと

もろてきた

(註) たんち＝赤ちゃん、うるしい＝うれしい、ごたむ

く＝文句いう、ほなけな＝そうでなければ、こっぽつ

と＝たつぷり、いちゃけな＝かわいらしい、おんぼら

あ＝たつぷり (金沢方言詩集『いちくれどぎ』

より)

このような天真爛漫ともいえる伸びやかな表現は方言詩だから可能なのか。それとも標準語で書くときには、どこか構えてしまい、内側からのリズム感を殺いでしまう何かがあるのか知れない。いずれにせよ徳沢さんの金沢弁の詩作ではパイオニアであることは間違いない。「たんち」(赤ちゃん)への愛に満ちた心持ちが赤ちゃんと遊ぶ楽しさを伸びやかに表現されている。この金沢弁の詩は本来的に詩が抱えていた言葉の面白さや発想の奇抜さを気付かせてくれる。子供と共に楽しむ、その場所の暮らす人びとや他郷に住まう同郷人たちに生きる原点を再確認させてくれる響きを方言詩は持っているのではないかと感じられた。

二〇〇九年に刊行された第九詩集は、福音詩集『シオンの

朝』(三十七篇、私家版)と記されている。その中に「あのね

息子よ」という私が最も好きな詩があるので引用する。

あのね 息子よ

ねえママ 神さまはどこにおられるの

高いお空にばかりいらつしやるの

ぼくのお家には遊びに来てくれないの

あのね 息子よ

実はね 小さな息子よ

神さまはどこにでもいらつしやるのよ

菜の花畑のまん中で

蝶さんたちと話しこんでいたり

亡くなったおばあちゃんの

お墓の後ろに隠れていたり

風になって口笛吹いたり

ある時はあじさいの上に降る雨の中

ひまわり畑と一緒に揺れていたり

紅い枯葉とかけっこしたり

ダイヤモンドダストになって

雪の上を斜めに走ったり

朝の食卓の白いカップの陰から

お前に微笑みかけられたり

悲しむ人のお隣りに座っておられたり

病む人を背負われたり

ホラ 今 空を見上げる

お前の瞳にもぐりこまれたよ

あのね 息子よ

実はね 小さな息子よ

明るい光の中で 口むすび

目を閉じ

じつと耳傾けてごらん

神さまの気配が ふんわり押し寄せてきて

お前を小鳥の和毛で包み

しっかりと抱いてくださる

その腕の中で お前は

キラキラ宝石のような言葉を聴くだろう

光りの方へ

光の方へ運ばれながら

この詩は徳沢さんの宗教心と詩的精神が融合した優れた詩篇だろう。徳沢さんの神はかつて「白い糸」で息子の膝を守る

つてくれたのだが、今は神を欲する息子の前の傍らにいることを告げている。例えば菜の花の蝶とたわむれたり、おばあちゃんのお墓の後ろに隠れていたり、ひまわり畑や紅い枯葉と走り回り、そして悲しむ人の隣りに神が座わるのを感じる事が出来るという。そして光の中に神を感じ、瞳の中に神を住まわせ、神の言葉を聞くことが出来るかは、その人自身に試されていることを、さりげなく息子や多くの子供たちに語っているのだろう。生きて存在することの驚きと感謝を神の存在と結び付けて光りの中に信仰を実感させている。その意味でこの福音詩集『シオンの朝』の「あのね 息子へ」という詩は、生きることで最も大切なことを子供たちへ伝えようとした徳沢さんの遺言のような詩篇だと思われる。

4

新詩集『加賀友禅流し』（コールサク社）の一章「加賀友禅流し」には、金沢のことを書き記した五篇が冒頭から置かれている。初めの詩「金沢の娘たちよ」では、金沢の伝統的な友禅染を着る娘たちに、いかに多くの職人たちが「いちがい者」（二徹者）となつて伝統を削り上げてきたかを本気になつて伝えようとしている。その冒頭部分を引用してみる。

江戸は元禄 宮崎友禅齋元祖のこの染め

江戸時代 近代 現在と

加賀友禅は生き抜いてきた

〈友禅は染工に非ずして画僧なり〉

という言葉が生まれるほど

手描き友禅は分業を避け

気の速くなる過程を いちがい者もんがのように

職人の心意気を伝えてきた

季節のエキスを図案に

露草の花汁で白生地に下絵を

彩色時 染料じ滲まぬように

糸目糊を防波堤に糊置き

加賀五彩を筆になじませ集中させる

下蒸ししたものに

糊を埋めていく中埋め

高度の熟練が要求される地染

染色を定着させる本蒸し

常に脚光浴びる友禅流しと言われる水洗い

乾燥 湯のし 仕上げと気の抜けぬ工程

一本の線にも息を詰めねばならぬ

（「金沢の娘たちよ」の前半部分）

私は加賀友禅の職人たちがへ友禅は染工に非ずして画僧なり」という志を抱いて友禅を作り続けてきたことをこの詩で初めて知つて驚いた。山水画の中に仏の精神を描こうとした

禅僧の画僧のように、友禅の職人たちは画僧の心を抱いて加賀友禅に数百年間も挑んでいたのだつた。加賀五彩という「藍、臙脂、黄土、草、古代紫」の五色を基調として巧みなばかりの技法で、虫喰いも描くと言われるリアリズムの図案によつて、喧騒に満ちた儂いこの世にありながらも、静寂の広がる美しい花園に眼を休めて、真に大切なものや豊かなものを取り戻させてくれる気がする。加賀藩の武家の気風と職人たちの美意識が生み出したのが加賀友禅だ。その加賀友禅の心を着る娘たちに知らせたいと願つてこの詩が生まれたのだろう。二番目の「加賀友禅流し」は二〇〇八年に刊行された『生活語詩二七六入集』に収録された詩篇だが、これも同様に男川（犀川）や女川（浅野川）で友禅の糊や染料を流す作業そのものが美しい芸術そのものであつたことを語っている。それらの美を生み出したへ友禅は染工に非ずして画僧なり」という職人たちの精神を徳沢さんはどうしても書き記さなければならなかつたのだろう。今までの詩集で方言詩集の中では金沢の伝統に触れたものがあつたが、それ以外の標準語の詩集には金沢の伝統を書いたものはなかつた。その伝統を担う人びとが見えなくなつてきていることに、きっと徳沢さんは危機感を抱いているのだと思われる。その危機意識がこの金沢詩篇を書かせたのだ。手描きでこの世にたつた一つしかない着物を作り出す職人たちの「友禅の心と技」を知つてほしいと願つたのだろう。

一章には、一九四五年八月二日の富山大空襲の体験を記した「富山大空襲 打木南瓜かぼちゃ」などの社会性のある詩も多数収録されている。金沢から小学一年の時に富山に疎開した時に街全体を焼夷弾によつて空爆された経験をようやく徳沢さんは書くことが出来た。母と兄弟姉妹と逃げ回つた経験を思い起こすことはためらいがあつたのだろう。二七三七人が死亡し、八千人が負傷し、市街地の一〇〇％近くの二十五万戸が消失した経験は重たすぎたのだろう。しかしこんな凄まじい経験をした徳沢さんには、戦争の悲劇を語り継がなければならぬ使命感が競り上がつてきたに違いない。この詩は二〇〇九年に刊行された『大空襲三一〇人詩集』に参加し収録された詩だ。また「あ・鳩は——長崎報告」も、二〇〇七年に刊行された『原爆詩一八一人集』に参加し収録された詩で、長崎原爆で被爆した母が産んだ子供には両眼がなく、その赤子のか細く泣く声を胸に染み入るように描いた作品だ。その他には地球環境に寄せる詩や、電車の中でフアッションでシャツを出していた少女とシャツが出ていることを教えたお婆さんとの心温まる「ハイ」など、徳沢さんが生きる社会の中で人びとの真のコミュニケーションを探していて、そんな言葉や精神を汲み上げるのが詩の試みであると読み取れる。二章「光に包まれて」には、金沢の自然の中で切実に感じたことや、障害者たちが懸命に生きている姿を愛情深く描いている。その書く視線は初期の頃と全く変わらずに障害者や

その家族に寄り添って書かれている。ようやく徳沢さんの詩篇の真価が今の社会状況において受け入れられるようになったと思われる。

第三章「ひまわりのように」は全篇が神に寄せる宗教詩篇だ。第九詩集『シオンの朝』は、教会関係者しか手渡さなかつた私家版だったこともあり、親しい詩人さえも渡されることなく読まれてはいないという。この第三章を読むことによって初めて徳沢さんがクリスチャンで神への信仰を生きる中心に置いているかが分かるだろう。冒頭には「神の魚」という詩が置かれている。その初めの部分には、徳沢さんの宗教観が端的に現われている。「北海道は八雲を流れる遊楽部（ユーラップ）川／ユーラップはアイヌ語で「共に流れる川」／何という良い名であろう／森羅万象すべて／共に仲良く生きようというのだ／この川に その時季になると／鮭の遡上が見られる／鮭は別名「神の魚（カムイ・チェップ）」／アイヌの人々は畏敬をこめて呼ぶ」。このような森羅万象の命あるものの反復行為に畏敬の念を抱き、自らの人間存在も「神の子」として命を全うしたいと書き記している。赤子や小さき者たち、さらにいうなら森羅万象に聖なるものを徳沢さんは見出しているのだ。最後に詩「土の器に」を引用しこの小論を終えたい。

土の器に

泣く顔と 笑う顔の
筋肉の動きは 同じだという
神は人間に

笑いながら泣く弱さを与え
泣きながら笑う強さをも与え給うた

昨夜 うす桃色の水を
激しく吐きながら
ヨブ^{*}の深い信仰に

背中を撫でられていると感じていた

涙をにじませて

もはや吐くものさえなくなった時

空っぽになった土の器に

満ちてきたのは

弱さという謙虚さであった

弱さというやさしさであった

笑って 泣いて

泣いて 笑って

この小さな土の器に小さな漣^{さざなみ}

この病から抜け出た朝

瞳のハッキリした秋風が

微笑みをふくんで

心の湖を渡っていった

漣なみなみ あおあおと

*ヨブは神からの手痛いいくつもの試練に耐え、信仰を貫いた人。

二〇〇九年秋に刊行された『神の問い―ドイツ詩における神義論的問いの由来と行方』（ヘルンハルト・ガイエック著）には序文で、翻訳者の川中義勝氏が近代詩を作り出した北村透谷、島崎藤村が文学的営為を模索している頃にキリスト教の賛美歌の影響もあったことなどを指摘している。ドイツにおいてもルターが主導した宗教改革においてドイツ語の賛美歌が旧約聖書の詩篇のドイツ語の翻訳によって豊かな源泉になり、その後のヘルダーリンなどを生み出す起点になったことを解説している。そしてガイエックの著作の中で宗教詩が近代・現代詩に与えた影響や現代の宗教詩の可能性を紹介している。そのような宗教詩の歴史の中で戦後の日本のクリスチャン詩人たち、例えば澤村光博や石原吉郎など優れた詩人も数多く存在してきた。徳沢さんもまた日本の風土に根付き宗派を超えた宗教詩を生涯をかけて書こうとしている詩人なのだといえる。この詩「土の器に」などは人間存在を極限ま

で突き詰めた詩篇だろう。赤子から森羅万象の聖なるものに畏敬を抱き、日々感謝して生きている人びとに徳沢さんの詩篇を読んで欲しいと願っている。